

Meeting report of The 7th World Congress on Inflammation

Kouji Matsushima*

第7回国際炎症学会報告

松島 綱治*

今回の国際炎症学会は、オーストラリアのメルボルンのCongress Centerにて8月20～24日開催された。開催会長は、M-CSFとマクロファージの分化について永く研究しているJohn Hamiltonであった。20日夕刻のWelcome Receptionに始まり、4日間に渡り密度の濃い、scientific levelも非常に高い講演、討論が熱心に行われた。全体としては700人の有料参加者があり、オーストラリアという遠隔の地で行われたのにもかかわらず予想以上の参加者があった。ただ、日本からの参加者が20人以下と非常に少なく、残念であった。

最初のPlenary LectureはNobel LaureateのPeter Dohertyで、炎症と免疫の接点というタイトルで、CTLの抗原認識、CD8メモリー反応とclonarityの変化をInfluenza virus感染モデルなどを用いて紹介した。2つ目のPlenary Lectureは、Marc Feldmannで、anti-TNF antibodyのRAへの治療応用を考えるに至った詳細な基礎研究経過、現在までの輝かしい臨床効果と限界、今後RA治療の標的となりうる分子標的に関するoverviewであった。3つ目は、Luke A O'Neillにより、IL1 receptor signaling研究から最近のTLR signaling研究にいたる彼自身の研究を中心にhistorical overviewがなされた。IL1R/TLRファミリー分子ST2がMyd88とMal依存性(Trif/IRAK非依存性)にnegative signalを与えること、MalのSNP S180Lのheterozygote集団がマラリア*P. falciparum*の感染に抵抗性を示すことを示した(この時のMalはTLR2 signalingに関与)、非常に印象に残る発表だった。また、Research Highlightsとして、Michael Karinが講演し、NFκBのclassic pathway and alternative pathwayの話と、NOD2 mutant miceのIL1β産生亢進を伴うDSS潰瘍性大腸炎モデル感受性亢進を話した。

IAIS(International Association of Inflammation Societies)参加Societyによる、Sponsored Symposiumも6つもたれ、非常に質の高い発表がなされた。JSIR(Japanese Society of Inflammation and Regeneration)もInflammation and RegenerationというテーマでSymposiumを主催し、慶応義塾大学の岡野栄之教授と私の座長でInflammation associated repair and regeneration, Inflammation Research based Regeneration Medicineについて4人の講演を行った。非常に盛会で、大好評だった。

この他、18のFocused Group発表があり、様々な疾患、テーマについて熱い議論がなされた。世界の製薬企業から、現在開発中の分子標的治療、たとえばp38, JNK, PI3Kなどの細胞内シグナル分子、TACE/MMP/ADAM-TSなどのプロテアーゼ、IL23/IL17, chemokines/chemokine receptors阻害剤開発などについて発表があった。DAP12に対するagonistic antibodyを用いた抗炎症剤開発に関する発表も非常に印象的だった。世界の製薬企業の研究者が、きちんとしたScienceを基盤に、

* Department of Molecular Preventive Medicine, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo
東京大学医学系研究科分子予防医学 教授

必死に新しい抗炎症剤の開発を行おうとしている姿がうかがえた。まだ完全とは言えないが、確実に Structure-Based Drug Design の時代に入っていることを実感した。

次回の国際炎症学会は2007年6月16～20日にデンマークのコペンハーゲンで開催される。また、2009年には、日本で開催することをIAISのSteering Committee会議で正式に決定、要請された。

私たちの日本炎症・再生医学会は、今後の炎症研究の方向として世界的に先駆的方向、すなわち炎症研究と再生医学の統合を示している。一方、今回の国際炎症学会にみられたような製薬企業と academia が一体となった、炎症疾患発症・病態機序の解明、分子標的治療、drug design、臨床試験のあり方／バイオマーカーなどに関する発表が、日本でもどんどんなされる炎症・再生学会を開催すべきと痛感した。